

何のために移住するのか、夢をかなえて新たな暮らし。

# 地域に求める

未知の土地への移住。その成功秘訣はあるのだろうか。  
こうすればうまくいくというセオリーは、住んでみなければわからない。  
受け入れてくれる人たちとの絆が、移住から定住へと導く。

「か」だろう。ブルーリバー創業者のひとり、岩崎積さんも青河町で生まれ育ったからこそ、「封建的な土地柄なので移住者を快く受け入れてくれるか心配だった」という。

しかし、それは杞憂だった。「まったくそうだったことありませんでした」と伊藤さんが言うように、住民は移住者をすんなり受け入れた。

青河町は最盛期に750人いたが、人口は漸次減少傾向にあり、約500人になっていった。岩崎さんと同様に青河地区の住民たちも、人口減少に対する危機感を持っていたのだ。

伊藤さん一家が移住して、今年で10年が経とうとしている。

「玄関前に誰かが野菜を置いていくんです。すると、あとで近所のおばあちゃんや『食べたかい?』と声をかけてくれたり、また、子どもたちも近所のおばあちゃんと一緒に田植えをしたり、のびのび過ごしています」

周囲の人にも育ててもらいながら大きくなった2人の子どもは、中学1年生と小学5年生に。今では「お父さんが転勤になってもここから離れたくない」と言うほど、このまちが好きになったそう。

伊藤家にとって青河町が本当の故郷になった。近い将来、伊藤さんは、この地に新たな家を建てる予定だ。

伊藤さん(右)の自宅前で、ブルーリバーの専務・岩崎さん(左)と。木造2階建て(建物延べ面積107㎡)のこの物件は、家賃月額5万3000円。リビング、ダイニングキッチンのほか3部屋あり、家族4人で住むには十分な広さだ。



# 理想の移住とは。

広島県

## 三次市青河町

### 行政に頼らない

### 民間による定住促進事業

行政の補助金に頼らず、定住促進事業に取り組みを行う  
広島県三次市の民間企業の成功が注目を集めている。

取材・文 ● 清水友樹(パウンド) 撮影 ● テラサカトモ



#### CASE 1 移住で母も子も のびのびとした生活を実現

伊藤美幸 主婦

広島県北部に位置する三次市(人口5万4712人、2015年10月1日現在)に、注目を集める取り組みを行う地域がある。同市は19のエリアに分けて住民自治が組織されているが、最も人口が多い十日市町(人口1万209人、同)に比べて、わずか20分の1の人口しかない市内最小の青河町(人口479人)で、日本の地方都市が抱える過疎化、少子高齢化対策として全国から注目を集める取り組みが行われている。

「そういえば今朝、家の前の畑に鹿が

いたんですよ」

周囲の人を自然と和ませような笑顔で語る伊藤美幸さんだが、青河町に移住する前は、子育てに多忙で育児ノイローゼ気味だったという。

伊藤さんが生まれ育ったのは広島県内の自然豊かな山村。そこは地域が一体となって子どもを見てくれるような環境だったことから、いつしか自らが幼少期を過ごしたような環境で子育てしたいと考えるようになったという。

そんな矢先に、新聞やインターネットで目にしたのが、三次市青河町で子ど



三次市青河町に移住した伊藤美幸さん。  
2人の子どもたちが通う青河小学校に隣接するコミュニティセンターで  
事務職員として働いている。

もをもつ家庭の移住促進事業を行う民間会社ブルーリバーの存在だった(詳しくは18ページ参照)。

**地元住民はすんなりと  
よそ者を受け入れた**

さっそく不動産会社を通して、ブルーリバーの物件を見し、移住を決意。2006年(平成18)9月、夫、3歳と1歳だった子どもとともに田舎暮らしが始まった。

移住を考える上での心配は、「移住先の住民とうまく関係を築けるだろう